

Shanghainese in Tokyo

東京の
上海人

樊祥達 著
神崎龍志 訳

東方書店

工业学院图书馆
藏书章

Shanghai in Tokyo

東京の
上海人

樊祥達 著
神崎龍志 訳

東方書店

著者略歴

樊 祥達 (ファン シアンダー)

1955年上海生まれ。1980年より創作活動を始める。《萌芽》《小説界》などの新聞・雑誌に小説及びルポルタージュを多数発表し、現在《中国城市導報》記者・編集者。

訳者略歴

神崎龍志 (かなぎき たつし)

1965年千葉県生まれ。東京外国語大学中国語学科卒。現在中国語通訳・翻訳者。

原著：樊祥達著《上海人在東京》作家出版社 北京 1992年

東京の上海人

一九九六年二月三〇日 初版第一刷発行

著者 ● 樊 祥達

訳者 ● 神崎龍志

発行者 ● 福島正和

発行所 ● 株式会社東方書店

東京都千代田区神田神保町一三二一〇一

電話〇三三三二九四一〇〇一

営業電話〇三三三二六九一二・三二

振替東京〇〇一四〇一四一〇〇〇一

装 幀 ● 戸田ツトム + 岡孝治

印刷・製本 ● 株式会社シナノ

定価はカバーに表示してあります。

©1996 神崎龍志 Printed in Japan

ISBN 4-497-96504-X C0098

乱丁・落丁本はお取り替えいたしません。

直接小社までお送りください。

本書の全部または一部を無断で複製複製(コピー)することは、著作権法での例外を除き禁じられています。本書からの複製を希望される場合は日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

目
次

一	旅立ち	6
二	悪い予感	16
三	暗中模索	26
四	日本語学校寮	40
五	野性の目ざめ	68
六	労働改造犯	86
七	ラブレター	106
八	労働災害	130
九	慰謝料	154

十	ビザの更新	176
十一	職探し	209
十二	再会	223
十三	新しい女	249
十四	南米逃亡計画	317
十五	上海貴族	359
十六	運命の行方	389
	訳者あとがき	398

東京の
上海人

一 旅立ち

飛行機が離陸すると、体が宙に浮き、重心をなくしたような嫌な感じにおそわれた。いつも国内の取材で飛行機に乗ると、同じ感覚を味わうが、今回はとくに激烈だ。まぶたを閉じ、ひじかけをしつかりとつかまえた。雲が漂い、眼下には海が見え、白波が立っている。

十年來の知己である王黙ワンモウとのやりとりを思い出した。

王黙は上海・虹橋ホンキョウ国際空港で、空港下請けの会社の職員をしている。彼の手をへて、日本の東京での私費留学手続きが取れた。虹橋国際空港のロビーへ行った。まさかその彼がフライト直前になって、先行き何があるかわからないと、予感させてくれようとは思わなかった。

わたしは乗用車六台に守られ、虹橋国際空港に赴いた。妻林林リンリン、息子の冬冬トントン。そして友人たちがわざわざ見送りにきてくれたのだった。

王黙もそのうちのひとりだ。彼は空港に近い宿舎に住んでいる。朝早くから空港で待っていてくれた。どこで手に入れたのかもわからない薄いグレーの中国民航の制服を着こみ、胸には特別通行証をぶらさげている。荷物チェックが終わると、

「まあ、そうあわてるな」という。

あわてはしないが、なにせ三つの大きな荷物は重量オーバーだ。王黙の仲間の手を借りれば機内まで安全に運びこまれることは確かだ。平凡な一市民が、破産覚悟で海外へようとしていている。ひとに頼むべきは頼み、節約すべきは節約する。不正行為かどうかは、知ったこっちゃない。

手荷物を預け入れるカウンターの前では、私費留学生たちが長蛇の列をなし、人と荷物でどうしようもないかたまりをつくっている。

ほとんどの私費留学生が飛行機は初めてとみえ、列に並んでから託送料金を払うのを忘れたのに気づいてあわてているもの、荷物の超過料金を払う金の持ち合わせがなくしきりに言いわけして空港職員に泣きつくもの、託送手続きを終え、あまった金を親戚や友人に渡すもの、と実に様々であった。

「そんなにあせるなって。荷物を運び終わらないうちは、飛行機だって飛べやしないんだ」

王黙がいてくれて本当によかった。おかげでどんなに助かったことか。わたしには目の前にいる彼が、とても頼もしく思えた。

チェックインを終えた私費留学生たちが搭乗ゲートに向かおうとする。彼らの目に涙はない。つらいどころか、自信にあふれた表情で身内や友人に手を振っていた。しかし、ゲートの外では親や妻子たちが涙で頬を濡らしていた。無理をするな、困ったらすぐ帰ってきて、などと何度も念をおしているのは、ひよっとしてこれが親子、夫婦の永遠の別れになりはしないかと心配だからだ。見送る側と見送られる側のコントラストがこれほどはっきりしているのは、私費留学生特有の現象といつてもいい。

ある留学生がこともなげにいう。

「何も泣くこたないよ。さあもう帰った帰った。おれは別に鳥流しにされるわけじゃないんだぜ

……」

別のものがある。

「そんなに泣くってわかってたら、見送りなんか来させなかったのに……」

また別のものは笑みを浮かべながら、

「じゃあね。いい知らせ待ってて」

泣き声の中、彼らにはこやかに軽い足どりで搭乗ゲートへ向かっていった。

数人が去ると、また数人がやってきて、似たような光景が繰り返された。

われわれは実に好運だ。

私費留学はいつからか金もうけの代名詞のようになった。留学手続きを始めたその日から、羨望の的となり、人々の熱い視線を浴びながら自信と誇りを高めていく。そんな自信や誇りになんの値打ちもないことはわかっているが、それでもそれはわれわれ東方の驕児には必要なものなのだ。

別れのシーンを眺めていた王黙がフツフツと笑った。わたしは背筋に寒気を覚えた。わたしだって彼らと同じように自信と誇りに取り憑かれたうちのひとりなのだ。だが、わたしは彼らほど強くはない。何度も何度もゲートの外の林林と冬冬を振り返った。

わたしはこみあげてくるものを誇りと自信で強引に抑えこみ、前を向きすぐ二人の目に入らない場所へ移った。自分の意志の強さを見せたかったのだ。

今回の出国のために山ほど借金をして、本当は心配でたまらないのだが、自信と誇りがわたしを成算ありげな男にさせた。

しばらくして王黙が、

「祝月、東京のほくの知り合いの趙乾ジヤオチエンに一応電話で連絡はしてあるんだが、もしかしたら空港には誰も迎えにこないかも知れない……」
といった。

わたしは耳を疑い、ポカンとしてしまった。

「まさか、冗談だろ」

「仕事がずいぶん忙しいらしくて、空港で待つてるかも知れないし、リムジンバスの終点で待つてるかも知れないそうだし……」

わたしは呆気にとられ、立ちすくんだ。

人民元一万二千元（当時の闇レートで三十五万円）で、王黙の友人のそのまた友人という趙乾の空港までの出迎えと住居と働き口を事前に決めておいてくれる、という「三点セット」が当初の約束だった。八千元という手もあるが、それだとパスポート、ビザ、日本語学校の入学証明書以外は、全部自分でやらなければならない。

コネがないものは、カネにものをいわせて、ひたすら留学の扉をたたくほかない。

わたしは別に裕福ではないが、とにかく一万二千元でこの扉をたたいてみることにした。これが七、八年前だったら、四千元を節約するためならどんな冒険にも挑んだだろう。その頃のわたしはまだ独身で、何も気にしないですんだからだ。

今は違う。三十三になり、所帯持ちになっている。家族のため、冬冬のため、そして自分自身のためにも、借金を抱えてでも日本で一旗揚げてみたい。

わたしはおそろおそろ王黙の顔をうかがった。

なんと言葉を返そうか……。

彼は面倒見のよい友人で、こんども趙乾という人物を通じて、きちんと留学手続きをすませてくれた。

もともと留学なんて考えたこともなかった。全くの偶然がきっかけだった。

三カ月ほど前、王黙に空港の免税店で外国タバコをカートンで買ってきてくれと頼んだことがあっ

た。その時、タバコを渡しながら日本に留学してみないか、その気があるなら力になる、と話を打ちかけられた。

翌日、妻の林林と相談したあげく、留学手続きを頼んでみようということになり、契約書も交わさず、ふたことみことで一万二千元の取引が成立した。あまりにも唐突に、そしてあまりにも安易に……。

わたしはこの十年來の知己には絶対的な信頼をよせていた。たしかに、空港に出迎えがこないかも知れないと聞いて呆然とはしたものの、まだ彼を信じている。

「祝月、リムジンバスの終点は新宿だ。どこへ出るにも便利なところだよ。虹橋空港から延安東路のチケット売り場に行くよなものさ」

と王黙。

王黙はまだ国を出たことがない。その彼がこれから国を出ようとする者を慰めるとは、実に滑稽だ。

はらわたが煮えくり返る思いだったが、極力表情に出すまいとした。

親友関係とは、自分が苦境にあつても相手を思いやることなのだ、と思ひこもうとした。

やがて王黙は同僚を探しに行った。彼らの助けを借りない限り、三つの大荷物は機内に乗せてもらえない。

ずいぶんたってから、王黙が急ぎ足で戻ってきた。何と同僚はまだ出勤していないという。

ついてない……。

わたしはしかたなく自分で荷物を運び、メーターの方へ向かう。空港関係者は乗客の荷物運びを手伝ってはいけないことになっているので、王黙はわたしに連れ添うようにしている。

メーターの示した数字には仰天した。七百二十五元分のオーバーだといふのだ。

七百二十五元？ そんな大金いったどこを探せば出てくるというのか。もはやびた一文も持ちやない。林林のバッグにも二十元しかないし、給料日までまだ一週間もあり、母子二人にも生活がある。唯一考えられるのは、物を減らすことだが、東京で生活する際の必需品ばかりでそうもいかない。

「代わり出すよ」

王黙が気前よく金を差しだしてくれたので荷物はベルトの上に積まれ、運ばれていった。

「本当にありがとう。礼はいつかきつとするよ。出世払いだけど」

さっきまでの気色の悪さはどこかに吹き飛んでしまった。

「奥さんとお子さんに別れをいつてきなよ。こつちもそろそろ仕事にでなくっちゃ」と王黙。

別れの時というものは、ついにやってくるものだ。

王黙とゲートまで戻ってきた。これが別れになる。いつまた会えるのかわからない。わたしは別れの感傷を抑えながら、五歳の冬冬を抱いてこちらを見つめている林林に視線をこらした。彼女の目から涙があふれている。林林の横には、冬冬のピアノの先生の白潔バイゼンも立っていた。

「ほら、泣かないで。もうお帰り……」

抑えていたものが今にもこみ上げてきそうになったが、大の男が人前で醜態をさらすわけにはいかない。わたしはこぶしを強く握りしめ、涙をこらえつづけた。そして歯を噛みしめるようにして、ふるえる口調でいった。

「もう帰りなさい。白潔、君からもそういつて。これから林林がいろいろお世話になると思います

が、よろしくお願ひしますね。君の留学手続きも東京に着いたら、すぐやりますからね……」

「祝月、安心して。大丈夫ですよ」

と白潔。

「ほら、お父さんにさよならしなさい」

小林が冬冬の手を取りながら手を振る。小林の目からは、涙が流れ落ちている。冬冬は何かいかけたが、すぐに小林にしがみついてしまった。

別れとはなんと悲しいものだろう。胸を引き裂かれる思いだ。こんなつらさが初めからわかっていたら、日本に行きたいなんて考えもしなかったろう。

「じゃあね」

王黙と搭乗待合い室の方へ向かった。

王黙が足を止め顎をさすりながら、

「じゃ、この辺で……、ああ、それから東京じゃタバコは高いから免税店で買っておくといい。パスポートがあれば二カートンは大丈夫だから」

思いやりのある言葉に感動し、

「いろいろありがとう。さっきの七百二十五元はなるべく早く返すよ……」

王黙は力のない笑みで、

「気にしない、気にしない……」

ふと表情を暗くし何かいいたげだったが、すぐに口を閉ざした。

「王黙、頼みごとがあるならいつてくれ。できるだけだけのことはする」

わたしは彼が家電製品でもほしいのかと思った。

「いいや、そんなことじゃない」

王黙は少し考えた後で、上着のポケットから一枚の紙切れを出し、

「祝月、ちよつといいにくいことなんだが、やつぱりいっておいた方がいいと思って……」

「なんだよ水臭い、なが年の友達じゃないか」

「これ、趙乾の住所だ。もしもだよ……もし空港にも、新宿にも迎えにこなかったら、自分でこの住所を探してほしいんだ」

わたしは突然、奈落の底に突き落とされたようなショックを覚え、目の前がクラクラした。

北京へ行くのとはわけが違う。なにせ東京なんだ。まったく見ず知らずの世界、東京なんだ。

「王黙、趙乾は君の友人の友人で、こっちはお互い顔も知りやしない。おまけにこっちは日本語はまったくだめだし、いったいどうしろっていうんだよ！」

「祝月、そんなに焦りなさんな。これは方が一を考えてというだけで、迎えにくるって……」

「迎えにくるなら住所なんていらんないじゃないか。要は迎えにこないから自分で探せっていうことじゃないのか。王黙、正直にいえよ！」

「祝月、趙乾はきつと迎えにくるよ……。じゃ、そろそろ仕事に出るから。元気で……」

王黙は小走りで、逃げるように立ち去ってしまった。

他の親友と同じように彼を信頼してきたのがいけなかった。

しかし、どうしてこんなことになってしまったのか。なぜ出国ぎりぎり直前まで、こんな大事なことを隠していたのか。散々わたしをかつぎ上げてきて、いきなりわが家がその運命を託していた梯子をはずすとは、あまりにひどい仕打ちだ。人はなぜここまで残忍になれるのか。

わたしはなすすべもなく、搭乗待合い室の真ん中に樹木のように立っていた。

前に進めば、悪夢が手招きをしている。引き返せば、林林や冬冬が待つてはいるが、戻ったところでなんになる。林林たちに話を聞いてもらったところでどうにもならない。家中の財産をかき集めても、借金の半分程度しか返せない。

魔窟に足を踏み入れるべきか、深淵へ踵を返すべきか。

わたしの気持ちは乱れ、すぐにも王黙をひつつかまえ、この一部始終を問い質してやりたかったが、もう彼は仕事に行ってしまった。

胸が破裂しそうな感覚におそわれ、できることなら大声で叫んでみたかった。

搭乗待合い室の人影がまばらになると、そこはまるで葬儀場のように見えた。

空港内のアナウンスが響く。

「お知らせします。九〇一便ご利用のお客様は早目にご搭乗下さい。繰り返し申し上げます……」

飛行機は雲を切り裂きながら飛んでいった。

豪華な機内は、左右に二シートずつ、真ん中に六シート座席がある。九〇一便の乗客は、わたしのようない私費留学生一色に塗りつぶされていた。

われわれはみな同じ地平線ののぼり、ここではこれまで自分がみんなから羨望の眼差しを受け、持ち上げられて得てきた自信や誇りなど、まったく影をひそめている。

これからはみんな異邦人になってしまう。

機内は異様なまでの静けさ。

みんな一様に顔をこわばらせ、ボートとしながら、自分の先行きに思いを馳せている。離陸後三十分もした頃、前の席の若い女性が嘔吐をはじめた。鼻をつく強烈な臭いが途切れ途切れに漂って